

さくら第469号

平成31年1月

さくら

発行所 さくらそろばん
発行者 平瀬重雄
春江町境 17-7: TEL51-1337
hirase@mx2.fctv.ne.jp

その時の出逢いが
人生を根底から
変えることがある
よき出逢いこそ
あつた

『出会いと心の成長』

テレビ番組で北海道がとりあげられ、道民の方々に「北海道で一番知られている偉人は誰」という番組がありました。

ほぼ100%の人たちが「クラーク博士」と答えます。では、博士はどのくらい住んでいましたかという質問には10年、20年と言う人などバラバラであり、インタビュー者が9ヶ月でしたと言えば、「うそー」、「そんなバカな」などと信じられない顔ばかり。

クラーク博士の像の数ほどの問いに、「さっぽろ羊ヶ丘展望台」だけという人が大半。その答えは8ヶ所あり、北海道大学敷地内の胸像をはじめキリスト教会などが紹介され、いちように驚いていました。

私は、ずい分前に展望台で右手を伸ばしている像と大学内の胸像は見たことがありますがそのほかは知りませんでした。

クラーク博士といえば、『少年よ大志を抱け』という言葉が有名ですね。[Boys, be ambitious ボーイズ ビ アンビシャス]はつとに知られた言葉です。

この、「少年よ大志を抱け」という日本語の訳し方と博士が滞在した期間について私は、20年ほど前に小林 巖氏(故人・元福井新聞社論説委員長・主筆)から伺っていたので、テレビ番組での質問に対する答えには察しがついていました。

ウィリアム・スミス・クラーク博士(1826年7月31日生まれ、1886年3月9日没)はアメリカの

教育学者、化学・植物学者であり、動植物の教師でした。1876年に札幌農学校(今の北海道大学)が開校されるので初代教頭としてアメリカから船でひと月あまりを費やして着任。自然科学一般を英語で授業したといひます。

故小林 巖氏に北海道大学へ旅した時にお土産をお渡しした時の返礼のハガキにこの言葉について、ボーイズは呼びかけであり、若者達よ、大胆に、好奇心をもってあたれ。という意味だと書いてありました。

ほかの書物に、有名な英文の続きの言葉として、liku this old man (この老人、私のように、あなたたち若い人も野心的であれ)と話しています。

この言葉は、クラーク博士が帰国したあと第一期生であった方が同窓会誌に発表したことから広まったといひます。

“青年よ、利己のため、はかなき名声を求めることの野心を燃やすことなく、人間の本分をなすべく、大望を抱け”という意味が込められています。

クラーク博士はこの地に滞在したのは9ヶ月ですが、この間に接した学生たちが博士から学んだことは奥深く貴重なもので、薫陶を受けた学生には内村鑑三(うちむら かんぞう)日本のキリスト教思想家、新渡戸稲造(にとべいなぞう)は5千円札の肖像画でも知られており、国際連盟事務次長も務めました。

古来より言い伝えられた箴言(しんげん)には深い意味が込められ、多くの人たちに勇気と感動を与えます。

10年間付き合っても相手の気持ちを理解できない人がいる反面、わずかな期間でも心の奥深く互いに理解し合える人がいます。ただ何となく同じところにいるのではなく、離れていても心底、互いの良さを認め合う人がいます。単なる時間の長短ではなく、相手を認め、信じ合い励まし、誠実な心で切磋琢磨するなかから互いの理解と絆が深まります。よき出会いが心身の成長をアップさせます。